

114年前は、麦畑が広がっていた殿崎。
歴史に残る出来事の舞台となり、西泊の
人たちにとって大切な場所となる。

先人の美拳がつなぐ絆

地区の特色を生かした、地域づくりに取り組んでいる、
上対馬町西泊地区の取り組みをご紹介します。



漁業から観光まで、いろいろな顔を持つ西泊

平安時代にまとめられた日本紀略に「仁志都麻里」として登場する西泊は、朝鮮通信使の宿泊場所になるなど、古くから人々の往来が盛んな地区でした。

また、比田勝港の北側に位置し、漁業が盛んで、殿崎周辺では農業も行われるほか、多くの方が訪れる三宇田浜などの観光地もあります。



印象的な
赤レンガの煙突の
正体は？



地区にひときわ目立つ赤レンガの煙突。これは、缶詰工場の跡で、30年ほど前まで、アワビやサザエを加工して島外に出荷していました。この味にふるさとを懐かしんだ対馬出身者も多かったことでしょう。



山から飛んできた巨石が、襲来した蒙古の船を撃破したとの伝説が残る三ツ石神社

半世紀続く「区民祭」

西泊地区では、毎年4月から5月に区を挙げてのスポーツ大会「西泊区民祭」を行っています。

今から51年前に、地区の親睦を深める目的で殿崎にある草地でスタートした区民祭は、今でも、西泊のほとんどの住民が参加する一大行事です。



仮装行列が行われていたことも



様々な世代が交流する区民祭



てば入れ競技は今でも続く人気種目

戦いに敗れたロシア兵が殿崎に上陸

今から114年前の明治38年5月27日、対馬の沖合で繰り広げられた対馬沖海戦は、東郷平八郎率いる日本の連合艦隊が、当時世界最強とまで言われたロシアのバルチック艦隊を打ち破り、世界に衝撃を与えました。この戦いで撃沈されたウラジミール・モノマフ号から命からがら逃げ出した乗員163人が、殿崎に上陸します。農作業をしていた西泊の人たちは、血や油にまみれ傷ついたロシア兵を地区に連れ帰り、米や芋を出しあって食べさせたり、汚れた服を着替えさせ洗濯したりしました。ロシア兵も、西泊の人たちの献身的な看護で元気を取り戻し、一晩をすごしたのち、別れを惜しみながらこの地を後にしました。



「ロシア兵を救った上対馬の人々」より



石碑を作って後世に伝える

海戦から7年後の明治45年、この行いを後世へと残していきたいと、西泊の人たちが石碑を作ることを思い立ちます。

地区住民の比田勝善三郎氏を中心に、若者たちが石碑建立の許可を取ったり、500円（現在の貨幣価値で200万円）の寄付金を募ったりと、1年かけて石碑を完成させました。



石碑の上に刻まれた「^{おんかいぎきょう}恩海義崎」の文字は、上陸したロシア兵を救った西泊の人たちの事を知り感銘した、東郷平八郎連合艦隊司令長官が送ったものです。



石碑建立に尽力した人たち

大切に受け継がれる石碑と思い

当時の石碑建立に関わる資料は、大切に受け継ぎ「農組」と呼ばれる組織で保管されています。現在でも、5人以上の組合員が立ち合わなければ開けることができない決まりが守られています。



清掃に力が入ります

また、毎年5月が近づくと殿崎周辺の整備を行い、慰霊祭を行うなど、石碑を大切に守り、伝えてきました。石碑建立から100年後の平成24年には、ロシア兵を救い、その行いを後世に残そうと石碑を作った先人たちの思いを次の世代へ伝えるための石碑を建立しました。



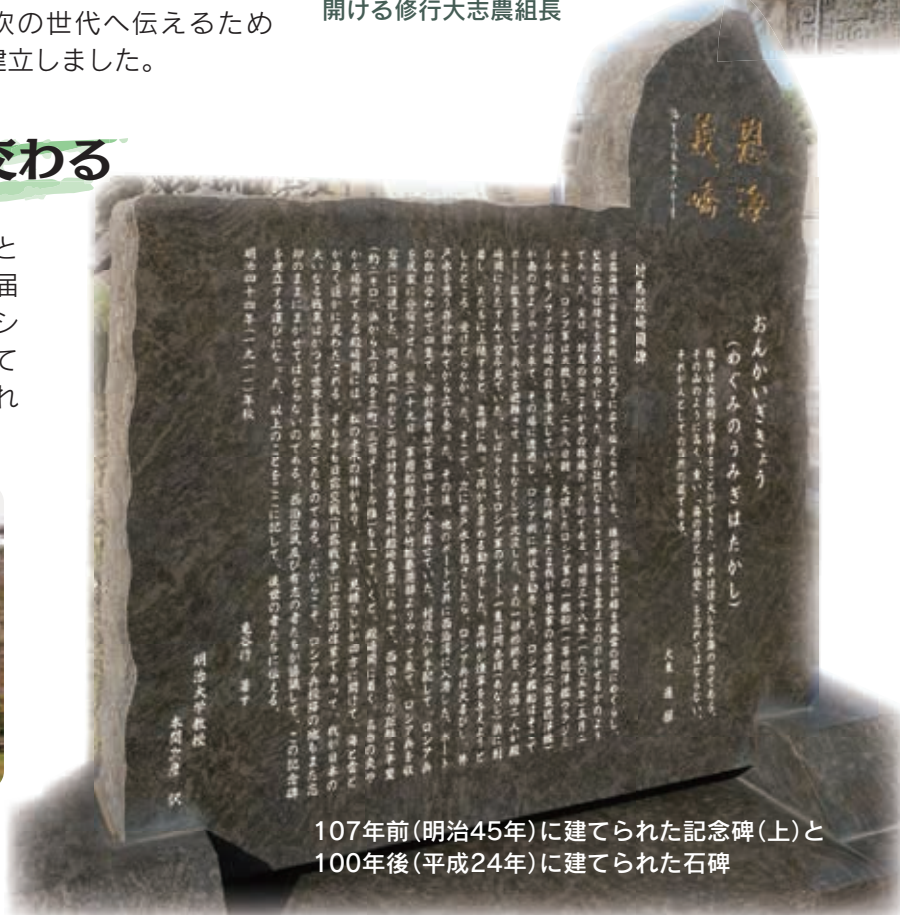
資料が保管された木箱を慎重に開ける修行大志農組長

悲しみの歴史を超えて交わる

西泊の人たちが大切に受け継ぎ、伝えようとする活動は、海を越え、ロシアの人たちにも届くことになります。対馬沖海戦に参加したロシア軍人の子孫が、追碑の建立や慰霊祭を開いていることを知り、慰霊と交流のため西泊を訪れるようになりました。



今もなお続くロシアとの交流



107年前(明治45年)に建てられた記念碑(上)と100年後(平成24年)に建てられた石碑

次の世代へつなげる

西泊では、ロシア兵を救った西泊の人たちの様子や、石碑を作り後世へと伝えようとした人たちの様子を、分かりやすく次の世代へと伝えるために漫画を作って、市内の小中高校生に配布したり、ドキュメンタリー映像を制作して、島外で上映会を開くなど西泊の人たちの思いを広く発信しています。



西泊地区が作成した漫画やDVD



ロシアの方々を見送る西泊の人たち
(ドキュメンタリー映像より)

思いやりや おもてなしの心で 地区を元気に

小宮 邦裕 区長

中学生から対馬を出て、定年を機に55年ぶりに西泊へ帰ってきました。皆さんの「思いやり、おもてなし」の精神で、自然と地区に溶け込むことができ、本当に感謝しています。

西泊地区は、私が居た昭和40年代から人口が半分以下になり、高齢化率も50%を超えて、ほとんどが核家族になってしまいました。あの頃と比べ大きな変化を感じています。少子高齢化などによって、元気がなくなっていくことは、対馬のほかの地区でもあると思います。

今年度、区長として活動する中で、これらの多くの課題を整理し、区の皆さんのニーズを聞いたうえで、どうすれば全ての方が、健康で元気で、生き生きできる地区を作ることができるだろうかと考えています。この地区には、114年前の先人の美挙に代表される、思いやりやおもてなしの精神が息づき、ほとんどの住民が参加する区民祭など、多くの行事があり、コミュニケーションの場があります。

今、私たちが置かれている状況も、考え方ひとつで大きく変化します。高齢化率が高いのも、元気で暮らしているお年寄りが多いと考えれば、少し違った見方ができますし、なぜ健康なのかを調べれば、市に、高齢者の健康について提案できるかもしれません。先人が残した精神や、地区の人たちのつながりを立ち止まって考えることで、何かのヒントになると思います。

先人たちの行いを、後世へと伝えようと活動する西泊の人たちは、地区に根付く「おもてなしの心」で現在抱える課題を解決しようと取り組んでいます。皆さんの住んでいる地区にも、生き生きと暮らしていくためのヒントが隠れているかもしれません。